【論文題目】

中里唯馬氏による Face to Face についての考察

名古屋ファッションクリエイション・ビジネス学科　細川聖矢

【論文要旨】

本論文は、ファッションブランド YUIMA NAKAZATO が 2020-21 年秋冬のコレクションで発表した Face to Face について、さらには中里氏自身についての考察・分析を行い、そこから読み取れる傾向や特徴、強み、価値、人物像を捉え、その上で私なりの解釈を基に、私自身がこれから先、行っていきたい衣服との向き合い方を再考する。

私は、中里氏の過去から現在に至るまでの全てのコレクションに目を通した上で、中里唯馬というデザイナーを、「人と衣服と地球とを調和するための強い探究心を持ち、衣服を創る意味を常に考えながら素材と真摯に向き合い続ける旅人である」と捉えた。そして私は、その「素材」という点に、より焦点を当てた服作りを考え、本論文では「私が考える服作りのあり方」として考察する。

「私が考える服作りのあり方」とは、「0」(ゼロ)の状態、つまり素材から顧客と共に衣服を創り上げていくものである。この考え方から、その実現に向けて試作を行い、説明と共に多くの制作プロセスを画像に落とし込み、素材の可能性、そして衣服への可能性を探っている。

【目次】

1.　はじめに

2.　デザイナー 中里唯馬氏について
　2-1　中里氏の生い立ち
　2-2　中里氏のアントワープ時代
　2-3　中里氏とオートクチュール
　2-4　卒業コレクションから 2018 年春夏コレクション
　2-5　8 人との対話によって出来上がる衣服
　2-6　2019 年秋冬コレクションから 2020 年春夏コレクション

3.　Face to Face の登場
　3-1　概要
　3-2　オーダーメイドとの比較に見る Face to Face
　3-3　Biosmocking の活用

4.　私の捉えた中里唯馬氏

5.　私が考える服作りのあり方

6.　「0」からの考察
　6-1　デニム生地
　6-2　ガラ紡生地
　6-3　W ラッセル×レース×紙
　6-4　端材から素材を作る
　6-5　「0」からの感想

7.　おわりに

参考文献